



TITLE:

[19-3]東北タイの農業事情：ドン・デーン村再訪

AUTHOR(S):

宮川, 修一

CITATION:

宮川, 修一. [19-3]東北タイの農業事情：ドン・デーン村再訪. DDニューズレター 1984, 19: 48-51

ISSUE DATE:

1984-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/236241>

RIGHT:

「日本作物学会東海支部」の許可を得て登録しています.

〔19-3〕 東北タイの農業事情—ドン・デーン村再訪

宮 川 修 一

(岐阜大学農学部)

A Note on the Agriculture in Northeastern Thailand —Don Daeng Village Revisited—

Shuichi MIYAGAWA
(Faculty of Agriculture, Gifu University)

筆者は1981年の調査に引きつづき、1983年6月中旬より12月下旬までタイ東北部の農村に滞在して、同地の農業の実態調査を行った。調査対象村は前回と同じドン・デーン村である。調査には前回とはほぼ同様の農学系、人文社会学系のメンバーが参加した。農学系における今回の調査の目的は、81年の調査のみでは促えられなかった作物生産の年次変動を知ることにある。前報でも述べたように、ここドン・デーン村の位置する東北タイの中央部は、平均年間降雨量が約1200mmと稲作にとっては限界的なことに加えて、降雨期間が6～10月に集中すること、さらに年による変動が極めて大きいことから、一作物の実態調査では作物栽培の実像を語るには全く不十分であるからである。この村の属するコンケン¹⁾県の米収量の年次変動係数が30%に達するということから知られるように、ほとんどの用水を天水に依存するこの地方の稲作は極めて不安定である。日本で我々が何の気なしに使う「平年作」という概念がこの地方には通用しない。平年作とは洪水、旱ばつのどちらかのある年の作物のでき高とも言う他ない。ここ数年の村の稲作をふりかえてみても、1978年の未曾有の大洪水、1979年の旱ばつ、1980年の洪水、1981年の軽度の旱ばつ、1982年の旱ばつに続く洪水とほぼ毎年なんらかの災害に会っており、その度に植付不能の田や収穫皆無の田が出ている。永年にわたる村人の経験では、これらの災害は5年の周期をもっており、初めの3年間は洪水もしくは旱ばつで収穫不良、その後2年間は収穫があり次年からまた収穫不良年となるという。このようなことから本村の収穫米は自家消費の為すべて米倉に貯蔵されるのが基本となっている。貯蔵米が尽きた場合は飯米用の米を購入せねばならないが、主たる現金収入は、村外の事業所への通勤および出稼ぎを除けば水牛、牛、馬などの売却の外、野菜、畑作物の販売に頼らざるをえない。村の農家の半数が菜園や畑を耕作し、トウガラシやキャッサバの生産に励んでいることは前回の調査で判っていたが、農学的な調査はほとんど行き届いていなかった。これらの畑作や野菜作の栽培技術の詳しい実態を採り、村の農業のトータルな理解を図ることも今回の目標の一つであった。前報と異なり本文の表題を東北タイの農業事情としたのも、稲作に加えて野菜作、畑作の状況もいくらかは紹介したいと思うからである。

村の位置や自然、社会、経済的な環境については前報¹⁾を御参考願いたい。また稲作の技術体系についても大略は前報に記したが、ここでは2年の後に変化のみられた点や前報ではふれられなかった方面を中心に述べていたいと思う。

83年は81年にくらべ雨の降り出す時期が遅く、村に着いた6月20日頃でも低位の田でさえ水はなく一部に少々の苗代が作られているばかりであったが、月末から7月初めのややまとまった雨で苗代作りも本格化した。播種に至るまでの過程は次のようである。すなわち2~3日間のうちに100~150 mmの雨がいった場合、種籾を米倉などからとり出し、カメに入れて水を張り浸種を行う。この過程で浮上する空籾などは捨てて選種とする。標準的には3日間の浸種ののち、竹かごに籾を移して上部を乾いた水牛の糞で覆い、2日間そのままにして芽出しをする。この間に苗代用田の耕起とていねいな代かきをしておき、そこへ充分な芽出しの済んだ籾を播く。播種後はただちに落水させる。この後の注水などの水管理は一切なく、排水のみである。苗代は平床で、一枚の田の全面に播種するが、周囲には小さい排水用の溝を作っておくのが一般的である。苗代は低みの田には設けず、通常排水のよい高みの田に作られるが、これは大雨での冠水を避けるためでもある。播種量は田によって齊一ではないが、おおむね坪あたり一合見当とみられた。また本田に対する苗代面積は約1/20程と思われた。

前述の100~150 mm程度の降雨は、また、本田の耕起を始める目安でもある。村の水田はノングとよばれる浅い小さな盆地状地形面上にあり、盆地の低みから高みにかけて一戸の農家の耕作地が連なっている。まとまった雨が来ればその雨と、高みの田からの流入(畦畔浸透が極めて大きい)により低みの田から水がたまり始め、水牛に犁を引かせる耕起が始まるのである。耕起は雨量に合わせ順次低みから高みへと進み、田植もその順序で進んでゆく。この点を前報では逆に述べているが、誤りであったので訂正しておきたい。このように播種ならびに田植の進行は、単に雨量の総体ではなく降雨のパターンに極めて大きく支配されているらしいというのが、農学系観察者の一致した意見である。地形と田植の順序と品種の対応は一般的には次のようになる。すなわち低位の田は田植が最も早く、晩生種を植える。次に中位田に中生種を植え、高位田は最も遅くに早生種を植える。これはかなり模式化したもので例外も多い。例えばある農家の場合、水がよくたまる低位田の面積が少なく大部分が中~高位田で占められているとすると(普通はこれと逆に低みの田の面積が大きい)、ともかく降雨後の水のある間に経営的な主力となる中位田を植え終ることに専念し、その後いつでも水のある低位田を植え、なお雨が来るならば残された高位の田を植えるという順序になる。また塩の出る場所をもっている農家の場合(東北タイにはsalt spotが多い)、低みの田に充分水がたまらねば塩分濃度が高すぎて苗が枯れるので低位田は田植が遅くなるという事例もある。

7月上旬から始まった田植は8月上旬に盛期を迎え、9月上旬に完了した。植付率はほぼ100%となった。他方出穂は9月下旬から始まり11月上旬が最盛期であった。収穫は10月下旬から始まったが12月下旬でもまだ完了してはいなかった。81年の状況と最も異なるのは、本年がほぼすべての田に植付できたのみか収穫も可能となったことである。前回は9、10月にはほとんど雨が来ず、高位田は早ばつのため全滅に近いあり様であったが、本年は東北タイには全般的によく雨が降って、この地方では史上稀にみる大豊作となったのである。村の稲の生育状況は、低位田の稲は概して81年とはほぼ同じ程度のできであったが、中~高位田の稲が極めてよく育っていたのが特徴的であった。81年の刈取調査の結果では、一株穂数5.5、一穂穎花数86.3、登熟歩合63%、精籾千粒重32.4 g、籾収量138.7 g(31地点平均値)という値が得られたが、今回は前回の低収田の底上げによってこの数字もかなり上昇するのも間違いない。無肥料栽培が一般的な本村の栽培技術では、水が収量規制要因として働かなかったことから、土壌

肥沃度や品種による生育期間の相違などが収量を主として決定したものと推測される。此度の豊作の影響は次年の作付を含め今後村人の暮らしに多方面で現われてくるものと思われるが、村を去るまでに気のついた点は、米倉の増築ブームと収穫作業の著しい遅延であった。

稲作における変化の2番目の点は、粳品種作付面積の増加である。元米コーラートなど南部諸県を除く東北タイは、北タイやラオスと並ぶ糯米卓越地帯であり、この村も例外ではない。村人の日常の食事は糯米のおこわであり、粳米は御馳走、病人用おかゆなどとして使われる。また市中の米屋においても糯米は安く粳米は高い。もとよりいくらかの粳米品種の作付も従来行われていたが、83年は粳品種の中でも特に香りが良く美味といわれ価格も高い品種の作付を増した人が多くみうけられた。これは明らかに販売を目的として作付されたものであり、米は自給飯米用として、いくら余剰があっても貯えておくばかりという。この村の米作りの伝統とは異なった意識がみられる。本村周辺、近隣の村々における品種選択の状況の調査によれば、粳米品種を非常に多く作る村のあることも判った。推測ではあるが、コンケン市の都市生活者の間の粳米需要の高揚が近郊農村の粳米生産を促しているのかもしれない。なおRD系やSanpatongなど試験場の手を経た品種も栽培されているが短稈型品種の作付はみられない。また糯の在来型品種は初型B、粳品種はC型と区分けできる。A型品種はない。

変化の第3番目には、耕起作業における耕耘機の使用があげられる。本村の支村的色彩のある隣村ドン・ノイ村の農民が耕耘機を購入し、1rai(16a)あたり120バーツ(約1200円)の手間賃で両村の村人の要望に応えたのである。賃耕の発生である。7、8月の両月は注文が殺到し、田に泊ってまで予定を消化していた。耕耘機の持主は2名であるが、内1名は自らの田を小作に出し賃耕専業となった。二、三の村人に聞いてみると、やはり水牛よりは、もし金があれば耕耘機を買いたいという気持ちを持っているようである。水牛は毎日世話をし、草を捜して遠くまで引いてゆかねばならない。これを皆厄介に感じはじめていられるらしい。注文主のすべてについて調査したわけではないが、たとえば働き盛りの当主は村外へ働きに出ており、また水牛の数も少なく、現金の余裕はあるものの耕起もなかなか思うにまかせないといった農家が多かったようだ。耕耘機のエンジンはディーゼルで日本企業製、その他はタイ製で日本のものに比べハンドルが長い。耕起にはディスクプラウを用いている。

変化の第4点は本田への化学肥料の投入である。野菜作に対する肥料の投入は従来より行われているが、稲作では全くみられないというのが81年の観察であった。それはおそらく、米が商品作物として位置づけられていないことに加えて、天候により当年の収穫の有無、多少の予測が全くつかないことに起因するものであらうと考えられた。しかしながら本年は、9月に入り、分げつ盛期もとうに過ぎたとと思われる頃、化学肥料を散布する農民の姿がみられた。硫酸が多かった。投入者は全村の1割程度と思われるが、いずれも本年が初めての施用ということである。この時期に硫酸を表面散布して、はたして効果があるのか疑問であったが、彼らはよく効いたと受けとめていたようである。さらに熱心な農家は牛、水牛糞(厩肥)の投入も行った。彼らが今年化学肥料の施用を決めた動機というのは、充分理解できているわけではない。9月に施用したとしても、あるいは洪水確率の最も高い10月に、出水によって水の下になる可能性も残されていたからである。ただ、前に掲げた粳品種の作付拡大を行なった者や耕耘機による賃耕依頼者との化学肥料投入者は重なっている場合がみられる。詳細な検討を加えるならば本年稲作に起った技術的変化の要因や、あるいはこの変化が一時的なものにすぎないのか、新たな技術

段階を村の天水田農業に画してゆくのが明かになると思われる。

次に野菜作、畑作について述べる。水稻以外の作物は村の近くを流れる小川沿いの土手に作られる菜園や家のまわりの菜園あるいは樹園地、丘陵部の畑地に栽培されるが、その他道沿いの生垣、藪、あるいは丘の上の林の中の自生植物の採集による利用頻度もかなり高い。試みに場所別の栽培あるいは半栽培的植物を列挙すると次のようになる。菜園の雨期の作物としてはトウガラシ、ササゲ、ヘチマ、トウガン、ダイジョ、パパイヤなど。乾期の作物はシャロット、ニンニク、コエンドロ、カラシナの類、カリフラワーなど。樹園地にはバナナ、シャカトウ、マンゴー、バラミツ、パンジロウなど。家のまわりには、上記菜園、樹園の作物と重なり合うものが多いけれども、その他のものとしてはココヤシ、レモングラス、ガランガル、メボウキ、タケなど。さらに池や小川の中ではハス(花梗を食べる)、キバナオモダカ、ミズオオバコ、ミズアオイなどが半栽培状態で利用される。畑作としてはキャッサバ、陸稲が専らで、その他ラッカセイ、トウモロコシなどとなる。その他クワやワタ、カボックなども菜園の一部に作られ、またゴザを編むカヤツリグサの一種も水田の一部や池、小川にあって利用される。しかしながら村の重要な野菜栽培地は小川沿いの菜園であって、平均1rai(16a)程度の園地が川の兩岸に連なっている。経済的に最も重要な、すなわち価格の最も高いトウガラシは、12~1月頃播種され、1~2月に定植される。収穫は3~4月より始まり、10月頃まで続く。トウガラシはどの菜園でも大きな面積を占め、中には一面トウガラシばかりの園地もある。トウガラシをはじめ、前述の様々な野菜、果物に加えて田や池の魚、カエルなどは、それぞれの農家(の主に中年女性)の手によってコンケン市内の市場で売られる。トウガラシについては村人の中で仲買いに立つ人もある。また肥料、農業の投入も極めて多く頻繁で、水稻作とは際だった対照をみせている。しかし、東北タイの農村が、いずれもこのように野菜作に熱心なわけではない。ドン・デーンのように域内に年間を通じて利用可能な小川、池沼をもっているところ以外では、灌漑ができないために安定した通年栽培はできない。また、近くにコンケンのような大消費地を控え、しかも交通の便がよいというような立地でない限りは産地としての成立はむずかしい。そしてこのような村の方が実は圧倒的に多いのである。

畑作物の種類は前述のようであるが、この内作付面積が最も大きくかつ現金収入を目的として作られるのはキャッサバである。しかしこの作物は、村にとってはそれほど古い作物ではない。1960年代にはケナフが盛んであったし、さらに1940年代にはワタ作りが行われていたようである。キャッサバ栽培は60年代末に始まった。この作物の植付は稲刈後から雨期前に行われる。収穫は稲刈前後が多い。本年はキャッサバに代って陸稲の作付率が高かったが、これは4月頃新植したキャッサバが全くの無降雨で枯死し、さらに追播する茎が自家調達できなかったため、オカボに切り替えたという例が多かったためであった。すなわちここにも降雨のパターンが作付・生育を支配する局面を見ることができ、キャッサバの価格はECの輸入規制などから現在kgあたり75サタン(約7円50銭)とかなり下落している。政府機関はこれに替るものとしてカシューナッツの導入を検討していると聞いた。

以上のような短い文の中で、東北タイの農業の姿がいくらかでも伝えることができれば幸いである。この稿を記すにあたっては、他のメンバーからの情報にも大きく依拠している。あるいは誤った理解も少なくないかもしれないが、責任の一切は筆者が負うものである。